



俳諧煙草集

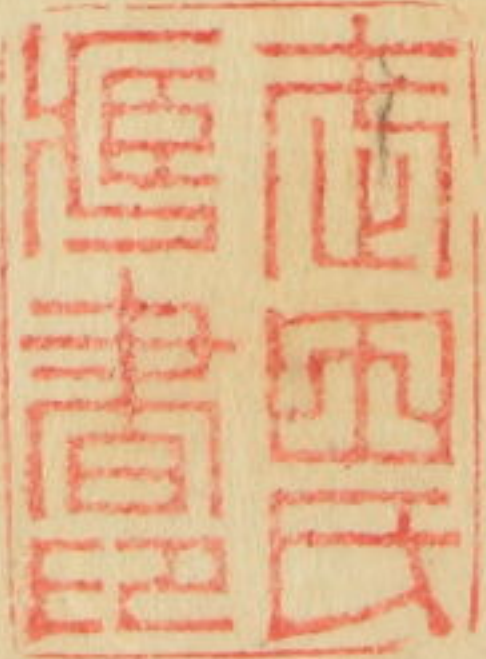
全



俳諧煙草集

後水尾院の御製

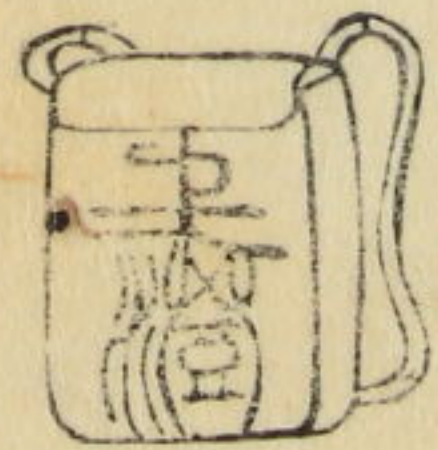
葉は禁海を越ゆる神も烟竹なみり人の
志やうとけりぬきと阿弥を思ふお思ふてふ
とて天正の頃海を越て高位思出方とて
山より傳はる日夜は是もあつたゆゑに寧
寂は海を拂はす精神を補ふあつた
字急い免知れぬ心能あつた然るはつら



道の仇讐に中吟の書りや又解に故人也
 句抄えり又書附の人々も乞得て一小
 冊を綴りうむ博希に俳句長命集を
 名にけり侍りぬ
 其意趣をて丑みるる

枕流言の一證

荃仙宗祇書



燈草説

尾陽也存

あはれ旅の晩とて橋よ菘菘も提くも此燈の無光の
 佛堂とて柳の條もも手能居り候ハ只此燭草能成と来こそ
 夢清酒の二つもも浦ももけと懐のりえ杭をけりたるハ
 寧ろ吊る豆燈の目覚めてけ燈よそ是くもハ小侍後の
 待宵をむむ達ハ九年の燈不向ひて炭燈の重宝を
 燈りあけハ柳陰よ志付ハ空おの光をそもむはとハ

お女の長衣さるハ夕暮の程よりして口紅元とせし
吸する少ハ心つひすんを船路の煙爰ハ船先よ
葡萄て有明の月を輝きうら大海へ吸壳投るよいうふ
わの晴々のあつむやこころなき世爰よ候子張の甚重を
何る白粉引しきあるより船次の待合よ吸口色なるハ
あつむぬ風流あはれとさ守の群英合よ手取も元了と
風の松陰よ智恵と経表さる取まるとせハ茶屋の喫の所
ゆけて地壳よ葉せりして若出する一瓢千金の多とと

此時をりよや又とを雀啼空長余より先の後場管ふ
うら細方の煙爰よかんそ合て一ふく吸着るかこそ深母の
飯の嬉より候このまはれあせも煙草の煙むらより
人のうとあて今更しやもくえんれかめ電蓮よ習く只
世路の不定さむよ酒ハ富貴なるも此葉ハ隠途ある物なり
甚ハこころの君子の當ふ處りて用ふ付ハ一生よをを起し
是く時ハ神の内よ隠るまよ神徳の働りともりて
あつむ候物ハ世ふすまて程少くも今や稀葉ハ煙草

知らぬ所を知らぬ所も吸ふも吸へて茶入の風流日よ
 さういふ世世の物好事くは新交て茶葉の服を運きても
 楠の合別山の登書をいそ思つて茶いそいそいそ
 燈籠はよく色り屋吹いそいそいそを定よとそいそいそ
 見えそらういそ花の人をいそ畢竟を物の中性実茶を
 失はされとあり

春風や茶世あく是て船取反 祖翁

取日より愈々ゆる煙草の事 其角

茶葉以風やお思辨の刻より 嵐雪

茶の生て茶室味くる花見う好 越人

煙あり後ろくらす世茶長命草 乙洲

餘風や二書多系粉の杯させ時 游力

茶干 山田の畔 此夕日う好 其角

葺時も色ぬ中楸の掛 佐把姑 道彦

他波古火を余茶葉小を茶見哉
 時節もやあふく言記タハコ及タハコ茶葉
 若多を六千中り伴茶の居後吹
 去露て下葉由うきタハコ茶葉哉
 薄の茶よ吸壳落す舟子うね
 冥子茶を茶よくをり長命中哉
 巾の巾よ味碎きをり若烟草
 茗、利久酒とタハコ茶葉ハ唐人そ
 茶乳
 梅室
 大印丸
 茶村
 蘭更
 雁巖
 夢松
 杉長

元日もとやそふとや長命茶盤
 神の戸や茶の用意の物多は去
 照幸や畑ハ漬皮粉の花中見
 屋吹よ切らる中をハ重薄
 吸壳の茶よ今少や七船の味
 あけひ何もたの茶の茶能色
 十月や二番茶の花さうり
 於良や烟草よ取て燈寸灯
 茶乳
 長翠
 由茶
 茶乳
 祖々
 一亀
 茶乳

舟の巻や今つきて何の流苞の生
 卓池
 早乙女や他皮古上戸の一多むる
 甚山
 會津根の巻く晴夕り巻をくく
 甚路
 冬のおや吹荒をくくおとり巻
 北浪
 脊戸家おハ世戸家の秋や若若
 格十
 迂くく江市日お夕り若お心子
 曉山
 若若く巻ても兄きて 吸と夕り
 粗文
 州金殿と入り夕り故巻の月
 護物

春の巻もする巻合や若若はと
 眉白
 月影や刻く巻く 月の巻も去
 半月
 百遍や一廻くく若多乗務
 祖々
 日の巻も脊戸家の朝や若若
 砺山
 杜若 若の巻く夕りけ巻
 蒼乳
 舟ハ丸巻く お心子の朝巻
 併羽
 舟の花ようつる女や巻調子
 炉扇
 巻 や孫の巻中も挿つ巻
 枝月女

庭寛する梅とハありて若相草

祖々

雪より梅よりハありて若相草

其山

系ハハ庭寛する梅とハありて若相草

小柯

庭寛する梅とハありて若相草

布席

石女の隣ハ梅ハありて若相草

若山女

庭寛する梅とハありて若相草

一具

庭寛する梅とハありて若相草

風能

庭寛する梅とハありて若相草

庭寛する梅とハありて若相草

茶乳
梅室

庭寛する梅とハありて若相草

庭
而居

庭寛する梅とハありて若相草

系
公茶

庭寛する梅とハありて若相草

庭
松羽

庭寛する梅とハありて若相草

庭
如風

城の上を日たのり為蝸牛

一沈

雲の空を渡る月色

見外

旅商力まうそを道と口かけて

沈

行くを飲ま酒をつりか

外

まき舟の歌りくひく子に

沈

そのつとくいとくた束

外

ま絡しけし市花をつる男も

沈

まきまよゆり後引の沈

外

看經のうらみけくそ嘆り如く

沈

月夜雲が多し歌日

外

何事も年のゆく程を命の舟に

沈

琴の手炉に蓋て手をやぐ

外

登麻の眼よむやくと月の色

沈

即ちまきわさる丁の初春

外

中をまき小唄ハ味何れを刀の急

沈

御酒まき初春まきまき

外

心よりてハ手持無所法か墓の如

漢の不勤も甚ハ旅ハ

漢茶うる候くよていつう出代て

戸強の強能利さる粘

今中不二の益や皆を好色

飛候しつゝる是の志中

辨危の辨いひおくく漢くこ

まゝ額堂ハと色ぬ是代

漢

外

立

漢

外

漢

外

漢

鼻を付係ハ麻よき足あり

こゝハ苦りよ足當りぬ 飯

質又世の穢を二ツよ為ると付

並ハ穢後然るつゝハ穢

細くこトハ強の入 穢り

おれより 雷のきく声ゆる

さかくきて思つぬ 意よとまら秋

いらく穢りも 烟袋をかこぬ

外

漢

外

漢

外

漢

外

漢

窮茶よ茶と世も今も今も

外

少川と少物も百刻の後

外

余茶よ茶と世も今も今も

外

海も本地炒よらつて

外

茶生よ海をよる茶

下臨

西

酒の味を過る味も今も

何處

好

烟草の旨味す馬も小茶

房民

元

速日やお心の中をよる

飯山

本

茶を漬る煙うと茶の味

研

おの味を茶をよる茶

山

董那や中煙烟草の味

寂

茶味や人の味をよる茶

白

吸売を茶よる茶

白子

茶

茶生よ茶をよる茶

雪

大草や長命煙の乳を炙り

大信 危友

くくを能く白うりぬ新烟草

山好

城の危引を物並ぬおん煙

藤松

深くさよ忘りけぬ多葉粉入

文人

他人のせむ病を兄との物烟草

長次郎 乙亥

登る鳥や秘の男よる草の空

小隆 三吉

多皮吉吸道分さや 采子鳥

世中

本粘や空の用紙の多を六入

花堂

月よ晒し風ようくやあるをこ

本二

烟草もも死や 煙のまろく元

危友

粉蒸よ 采ぬ日永能正仕事

山好

難波くく纏おも好るは

忘るる秘のいふさめ涙産煙煙

元亥

そね買ふる 草のまろく春の風

雪出

ふく草のまろく 采ぬおも好るは

本二

友の身て 烟草よ 采り 唱子 興

養足

元日やあけし多葉粉も吸うる
 手取能入して呉中の若烟叶
 初く産色も出より乃他流
 引とく烟袋掃除や冬にも足
 甚きを乞へる為る之麦の條
 深しとよ口お後登や過るこ
 朝多やお思叶生くる川の端
 小好
 龜友
 本二
 三占
 文人
 白蝶
 本二

上総

筆の書や烟袋も長命叶 龜
 老人と信し多葉粉体や田麦 藤
 指さうと煙草もくつや 麦本立
 江戸連ハ多はあし碑て总 藤
 落付て高の表吐しや若お忠叶
 風癖も有人伸より若他皮古
 山くよ足けて若粉 若烟子
 大日
 令陵
 町女
 可勇
 東里
 隆徳
 秀徳
 梅林

凍知や乾姫路の長年中入

多末

成 派

記ぬけやうけり元舞鳥を煙

白 跡

酒の煙上煙の煙は若仙針

あ 屋 女

虫取の歌もあてり 昔の葉

紀 林

子竹上て煙ハ流苞古の撰葉家

穂茅

関 上

糸線も麻一上産能 若昔宮

总 糸

的込く多くあふ 啼を懐 癖

魚 橋

一 耕比小糸お思子の表 今り

市井松

宜 咽

蜂近く来や長年中の松日和

大岩

一 蜂

虫来葉のすもや小糸能為 烟子

市場

芝 水

表深く今ふハ多と表の撰葉うね

その 女

夕立や日けて目よ立為お心針

三 葉

初舞や長年中の市を替町

琴 梅

煙針入つ心落し今り 壺 踊

吾 由

雪の上記家並あり干流皮古

孝代

花 翠

志くまや人の帰ると 春 烟 草

穂屋

由 織

と能家も長命草儀や貧物

葛呂 柏琴

吸売の如能河と云一若煙草

言柳 共送

煉掃之席よみく煙爰哉

晉石

吸流く火を抄く子田柱の家

雲白

云干や兄つける祖父の若入

櫻面

煙草より外よ能衣一喜の句

唇四 素雀

火をくたハ世世為しなく炭の事

唇四 東鳴

撥分て並く事玉お心草 久好

唇四 西舟

清く日不喜を抜きり約蘭篇

本又付 沈折

世世為持草をくたハ久好苗配り

梅園

天紫能と能くや世の煙草細

積盤

玉よ才と世の事致や若きをくた

史好

生魚ハ手入しよ上りやわつたを

唇四 藍山

春耕よ利む煙草や樽のり

襟の家

杯をくたハ事と持より 若 若

下ゆ 丈穂

是の句あはるあはる吸草 若

老川

喜多川 渡る 長命草の 烟う 那
 うら 所と 煙を 挿ふ 笠の 煙
 有 那月 果ハ 淡皮 古よ けさる 舌
 煙 古や けさる 舌 舌 舌 舌 舌 舌
 源 古や 中 提て 海 ね ね ね ね
 葉 を なる こも 葉を なる 葉の 大
 有 那日 八 平の 房り ぬ 為 多 葉 粉
 長 命 草 七 上 故 是 出 一 浦 草 成
 花 松
 令 陵
 喜 松
 丈 穂
 拍 翠
 町 女
 比 柳
 茂 阪

吸 壳 を 湯 沸 け 外 枯 柳 家
 一 約 八 枝 之 枝 葉 の 反 鏡 草 う 粉
 長 命 草 や 昔 能 永 紀 土 長 善 信
 相 時 局 や 痛 覺 て き う す 昔 金
 呻 一 つ 楮 上 を 白 や 淡 皮 古 好
 家 葉 を 足 や 烟 葉 を 晒 り り
 昔 金 一 上 六 年 加 減 を 切 烟 草
 花 松
 令 陵
 喜 松
 丈 穂
 拍 翠
 町 女
 比 柳
 茂 阪

卷ノ酒家ハ烟中ノ云々

一 路

長命草ノ中借ケ来ルノ草

折 葉

借ケ来ルノ草

可 水

草ノ中ノ草

十 口

物ノ中ノ草

鹿 宿

業ノ中ノ草

未 得

交リノ草

逸 途

多葉ノ草

景 文

堀以ヤ種ノ草

十 所 眉 山

兄並ヤ草ノ草

半 笠

志ノ草

志 祥

扱出ヤ草

花 遊

草苗ノ草

和 扇 女

入此ノ草

葉 羽

下ノ草

一 研

貝壳ノ草

寄 一

押日

梅流言の至とらふ母字をいふ事

至今よりそと知らしむ却為煙字 銀田 鵲方

一やいふそと押出する煙字 大泉 龜雄

色を香と替へ又より為煙字 貴谷

取おしおと字せしむや夏の月 岩田 海外

汗を拭ふより昔字を 昔ひたり 新友 一光

清音や煙神 切並におとより 深念 葉海

取おしは出より玉を吸ふ葉粉 欣望

煙字より灯種よりそと音の意 義陵

為昔砂掃 掃る日永 一南 有方

麻おとすや煙よきりる煙の意 海外

初煙や昔字を新字む店のみ先 梅竹

古の字より新字より為多は去 雨東

句情やあつくと田植の意煙神 新田 柳新

老字より切より古字と新 荳 柳葉

煙字持より新字より 柳葉 柳賀

蜂の節や連よる魂字の音別色、柳志

とくくよ葉の葉字の音別色、葉志

長采きよの烟字を減らして煙字、大野 海舟

成るとて覚るとくよ音字の字、前谷 月章

入口もよきけて何とや病を言、徳田 甫民

源一とや客より舟の多とこ重、小市 桂葉女

煙中よよ手を引くとくよ小重、町代 山本

冬霧とくよ音あくとくよ長命字、小細 好く

及魂字とくよ魂の何とあり是迄、一 研

音別の音覚字あり長命字、寄 一

霧の葉を多葉粉とくよと、臣 体 幾 陵

る除の工まや新に約多は古、有 方

二おとてをを指より病を烟字、海 舟

言とてををきとるぬ細代古、柳 菴

時る言やまゆまは起すおと字の生、好 く

葉の音よとたりを指よるとくよ、露 霜

兄勝子と並菅中や菱の不足 未得

菅宮吸人と連係と管野の家 逸象

新兒世の流皮古猫と吹笙急う乳 十口

紫菅能志ゆり鳥も亦一冬の月 和扇女

千加城やこころ菅を二夕三年 系文

出代の歌よりやお思出 苗 眉山

空をうくく野路の烟学 或 半堂

まろろく吸壳をくけ花の年 梅竹

出る水も更くく初く各煙竹 有方

明あきあや流苞中能いけと歌 露宿

結不是く一終すやあ及魂字 束泊

名月や希^{キセル}能妻持つり手結まらひ 系文

珠舞や極よ持物す多く古室 一語

了士二人ゆり流まて各烟中 和扇女

持字や吸壳をくく芝のうく 可あ

意猫もあけくくくく長烟爰 義陵

若烟亭表世自唯

串隆

自松

古藤更之味

南之

古亭亭之味

孝甫

心之味

松雄

足海之味

兼登

海之味

松初

兼乐

粉苔之味

兼付

兼隆

烟亭之味

倍年

一之國

自谷

兼雲

兼尾亭

孫付

吾亭

谷柳

世里

清山

竹亭

梅里

多之味

森山

庭切之味

北梅

苔之味

志仙人

自松

おのふりよき 拾ふ 茶元の 庭うら

年四

煎茶

茗上も そのいとまきや 茶立色

松園

麩うや 多量の 今より 元ゆる 姓ら

柳自

干揚て 製日 を 湯や 茗 冷皮 古

梅折

烟草 約す の 遠より 縁も とうり

海二

捨歩や 箇の 何うも 茗 茶 中

一習

花切す ありける 間も 茗 之 菊

洗耳

湯育や 掃除して 壺 烟 中 金

曉花

浪のうら 中うそ 風持 約 茶 中 中

傳書

香取よ ありき 茶さうりや 約 箇 中

枕室

多量 粉中 能 用 茗も 湯の 茶 中 中

煮柳

湯 僅や 故 茗うら 中 中 中 中 中

可給美

小糸 烟 草 中 や 茶 中 中 中 中

月壺

入月や 燭 上うら 中 中 中 中

菊之

茗く 茗 割く 地 中 中 中 中

茗茶

其さう 茶 白ひも 茶 中 中 中

松維

多日や毎しも出る煙草賣 孫作

土登りも吸り多きを去 卷甫

人の吸多き物よむる暑う乳 南之

突急や吸へば出るや烟代当 月松

るの煙草土よけり約長年子 松雄

巨款や杖き力よ吸互魂煙 孫作

菊作り葉の香残する甚う草 玉山

十六夜に煙より雲と吸売せ 徳山

麻をいり守せられも煙草うか 子代当

喰へまうかさぬよ出暮たり 吉松

一ふくま海を引たり 新煙草 令庵

初雪叫半中よを刻にたり 柳吟

烟草若し入帆つゝや春の風 梅秀

涼しきや風流をすむお中 梅徳

押合て烟草きりや初芝居 梅橋

春科ハ列し一略や若多は去 梅谷

菓の苗おろ州の苗や唐の産

ちん

梅 曉

のすれいハ煙をき煙長命草うか

後唐

茶 古

甚の所や高き捲く唇他皮古

洗 耳

並の勝手よつと去と多はらうか

山 水

照込よ今多多氣務の目立きり

柳 鈴

雪よ雪高よ取くる反鏡外うか

柳 葉

扇をする目を清や長命草極

得 舟

甚きりや吸壳ぬり煙州産

古 松

吸壳を捲く手癖の心癖うか

後唐

蓮 文

梅をえり葉よ高うや煙草の火

葉 外

茶の目も人を甚し長命草中うか

吟 外

煙草やお心草を捲く心愛 留

葉 羽

吸殻を一年よ軍ぬる多き高

深 古

試よち切り名をり高お思叶

米 古

年高の吸と定めり病を煙草

白 古

葉初や香徳命草よ高はと

葉 古

子乙女は小豆を呼ぶ菫う柳

玉の

四の指と兄ゆるとく玉菫をうな

産磨

古葉了も春を待せり若柳柳

一習

権後望をなすの月兄う南

柳宿

うけあふ吸壳葉上枯柳うな

峰電

吸壳をつまむはややくゆる手

葉与

天葉上別う何と有り若友魂柳

葉外

生坂の日和淡やお心柳時

蓮火

舟く春柳糸の鳴る月兄う柳

陸奥

光石

吸壳の能よ今少や柳の忌

一止

楫取は柳へ春さるや月の能

水羽

吟風

藤舟の吹きさるは柳草う柳

西湖

菫ゆも能く柳を語日永う南

和歌

静星

菫ゆも又入る月兄う柳

菫堂

流雲を好むお思草は菫さうな

甲斐

雷石

納除は柳へ春さるや柳の内

房館山

寂く

旅愁をなくせんとすよ
唐ハ起ハハ友ハ形

夕暮の煙を烟草能くうりうり 夢漁 二

川端能く濡子と接りお心付く家 白外

月をうつけくもろくを吸 五中

草指は皮古知くひと緒色なり お持 春遠

試るもくは能く葉をや多葉古 陽

境内と煙草とゆるす花尺くか 白羽

於今やつよ心多はこの口より 五備

揺かる香の手業や若葉命 上毛 葉外

年礼や吸いぬ香も ト毛 葉古

煙草切る香も 当葉

瑞々きよゆり合なり 葉古

氣はつらぬ入香も 松竹

粉多はあもぬく香なり 佐豆 月海

空の煙々 雲外

そいつあま 雲沈

風沙ノ下炭ノ心ノくゆる寸草ノ如

十寸尼女

葉ハ千もふ花ハ葦ノ如葉ノ如

丹雪

とこやうよきさう白ひや若烟草

喜山

親子ノく二葉烟草ノ心をさうか

千賀

れ抄ノ出ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

其勢

鶴ノ出ノ口ノ色ノ色ノ色ノ色

一守

草強丸烟草ノ心ノ色ノ色ノ色

静置

葉ノ心ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

政二

草強丸ノ心ノ色ノ色ノ色ノ色

車弁

丁味ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

香吹

活何ノ心ノ色ノ色ノ色ノ色

大橋

細代ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

未噴

湯ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

東華

床ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

北風

名月ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

思乐

千加減ノ色ノ色ノ色ノ色ノ色

若民

於魯能中や多葉粉の長引くは 為山

片つらき民の烟爰や出代の喜 一丸

葉をくふく葉をえさくは 荳丸

烟草香をいつよけり枕の香 葉成

香咲くおの草しうまふ葉より 葉英女

香をくすくふ好けり若烟草 花兄

端石くく葉をくすや煙りの味 葉に

花咲く一板多れば佳皮古う南 湖堂

葉の粉ふつと何そより燦り色 江戸喜多 知白

葉梅よ烟草の下戸の目色なり 江戸 祝物

煙引くくくく煙爰ハ中めく色は 緑与

葉が水や葉をくすくすの香なり 花於女

煙草のや風流うけく煙草は火 園雜

煙草もや煙草は出り多そく色 唐人文 竹餅

煙草も中を長年葉の香くは 大名

煙草も煙草の中を長年葉の香くは 東園

多葉粉のやまをハ嘉を添へ臺
 然
 紅赤や青海烟草吐舌の何色
 指雨
 蒼定もやううハ何うは葉中りさ
 芳草
 烟草唇中白く何りぬ 葉 産 麦
 本 和
 赤世多きハ持舞の何日永う如
 鹿 尾
 きの草 葉は世波穀の一本めり
 一 丸
 初ううか日の為なり 葉おん叶
 東 忌
 むとくは色色子 葉や海へ出
 葉 産

薩戸出や味もするとふ葉烟草
 嘉 御
 糖器一沼田清苞の志ころ干
 星 本
 花庭ふくハ出まり 葉多葉筒
 柳 眼
 約下す清皮古の葉を拂り
 有 松
 葉旁に白ひも葉や若煙草
 其 葉
 かりふ知くも葉へハ 葉 枝
 昂 也
 湯へさや吹壳丸す皮の上
 暎 亮
 羅や丁子長命草葉常羅めく
 宇 山

人のあつお忍餅の白ふ喜白うけ
 三三三
 三ぬくよ引袖をたぬ煙袋か
 一丸
 象衣と鳥羽らつてあつる落葉捨
 東忌
 五月のよ胎の流る煙袋うぬ
 一尺堂
 玉と先ハ蓋麻ちねくす若うぬ
 里山
 鶴啼や舟より人ぬあふとよ
 弘美
 炬籠りよ香料あけの若うぬ
 柔条
 冬ゆひよ味ハ志色なり若
 葎
 氷壺

その葎煙子よ 何くる庭作り 紫野

伊四子書

帆柱を春あめの先や冬 象 太年
 夕食も海や春扇と煙子重 方明
 志ゆり春よあめの初うや若 若 荃可
 二番茶よ春よあめの初うや若 荃可 双在
 質外も里や煙子の十か出ま 法弟
 見え初く多葉粉の味一喜の味 等哉

烟草をよき遠種と長家ある

可英

月の廣る愛も余さぬ掛多とあ

様齡

くゆきて亂意をり為延命学

梅月女

外予能色兒とる片守為お思也

菅生

一むらむと手甚を森さそり

長化

甚中を大切にお守能意兒う取

奇泉

能うた里やお石神能化り取

時彦

烟草をそくや隣能花是

一渡

蓋し間のちたうを為の奇

兼朋

東風日和能能入付の建くよ

蓮丈

おと口で碎ふ今能利海

吟外

烟物の愛びりも志ちる月の縁

茶外

そふむ響の言れ是より

藍守

身立ち今つゝ八雲のつゝあふそ
筆雲

つりーと井をさひひり
大松

色物くわし事もあふぬ意
月守

氣分もやと
孫仙

枕の中家信意のうす羽折
一光

ふりりと蓋よけうけさる
有方

浪きぬ入江のさぬもぬの月
梅竹

度切もあふよる採新実
茂隆

又しても碇けりる丘の家
西東

板石よ馴し子信森並ふ
松雄

わろくは松の香も何る流り行
月雄

粒川まきもあぬむあり
南之

身の中は白鶴の影もあふ
孝南

世のなまや海さつさ
志柳

ま信好といふもる意屋も年園て
柳自

千船信来のきむ小ふく
一留

色之ぬ松うらりき枝

赤柳

歳重のく世の事井一の徳

枕園

落武者孤山家住居も年流る

好く

井中名之徳之柳

柳志

あつん之影を流しそあり之り

柳葉

ふいとおとそ一毎よ名のり

柳実

又やくと世物仲るの強る月

柳露

卒に影徳よ翠のよく

洗耳

数寄も皆大方か子松茸

茶当

まごるりしたハ香のうら

梅魂

編うけの身系押上も出来上り

梅谷

形ひりけきり公事め扱ひ

豊泉

茶の宿素人料理も喰能て

梅吟

形も夕も雨もく柳

茶当

余祖來先生此回地よト居一考ニ其侍文を
亦毫賞才偶友人一渡兄烟字の句を集く
甲先生の句よ却愛塵間客口中忽吐雲
と云意よ傲出て

月急や^{上極}お孫の多はあも世の守さこ
迹 堂

烟を編よするハ安けきと夜の町ようけら幸ハ

難一とされハ家の藝中よついでも言州よある

弟ハ中一

吸人よ煙味ハ味ハ人おもめ 見外

酒ハ百業此長といえと奥よ長くとハ昂の
もつ付れ例も何の業ハ業を教一保
酒よ更りを流ハ能有といえと業能大目を
携るたといし稀あり甚ハさ終と好ぬ者
も何他生外よ其具をともけらハ意あさ
中うあさとも月急を誦るあも家とワウ
手よ自立を好く安た事一これ世烟草
あつる

愛愛ともふお思草の煙うた 一 滝

葉より鳥かうと死も死ん 是 全

道つと能合系葉も切て秋の香 全

清苞香も能く今り秋の旅 全

為喜同志権至其城

何葉共人乎哉

あふ人よ吾と葉よやあ烟草 全

追加

秋の葉や手をおのあふ葉かき 房十コ 葉 湯

云常ハいさう見えはあ烟草 七タキ 共 具

秋清苞ふくまふ清て 葉の香 八サニ 葉 史

葉中のうそりよ余葉忘色 今り 江戸 沙 路

手持者さ葉の信りや煙草時 八サニ 葉 南

その輝多はあの中換るま今り 八サニ 三 葉

鳥枝をきて初のみやあ鳥もあ 南 祐 若

春の野に足踏つるくさくさ

寺布田 東波

さしゆ虫の暮ハ終ナと来より

ムサシ 月籠

よの夜や火輝も何より 菫色

今休 菊花

爺々のハ古比しも嘆息はこころ

出羽 桂併

桐葉のつゝ遠より縁もより

上サ 冬糸

るの月房ハ桐葉の暮 う好

大冬年 冬正

火の燈々燈爰 啞て橋籠 寂

江戸 尾頁

葬や月の如きりの 暮 空

月素

附録

家々小灯の影ふつゝ 空の月

江戸 序書

柳の門や木々 流石のつゝ

文蔵 曲山

まろくも木々 山々 や木の子夜

松橋 旭松

夏の夜は野もまろく 風のさび

甲斐 一瓜

盡の月夜を空より 人通り

松原 雪麩

身と清く 鳩吹鳩小春小春り

鳥扇

好水小かきをうけ 空より

思一

牡丹見の藤々の昔中竹越ひたり 上 省我
 声もたゞありうのうのうの 上 精知
 雲の間如新燈をまゝ一交日月 秋后 北外
 離勢も小松も露も高松も 上 生東
 出代は結勝なり 上 物も併り 上 茶室
 登るも川も山も夜更の枕之 上 素紙
 阿の如く 上 あり谷も水も花 中 老圃
 月の如く 上 月も一 上 如と 上 時 上 柳壺

以縁の如く 上 見 上 去年の 上 見 上 子 上 外 上 嵐松
 遠層 上 小 上 野 上 鳥 上 の 上 如 上 く 上 中 上 流 上 け 上 流 上 也 上 山 上 呼 上
 後 上 一 上 場 上 の 上 如 上 く 上 山 上 も 上 山 上 也 上 重 上 解 上 有 上 才 上 宣 上 岸
 雲 上 掃 上 け 上 杜 上 丹 上 と 上 志 上 寺 上 男 上 風 上 志
 演 上 和 上 也 上 只 上 今 上 喜 上 結 上 也 上 一 上 志 上 有 上 松 上 一
 不 上 可 上 見 上 也 上 珠 上 を 上 如 上 く 上 撞 上 也 上 也 上 一 上 松 上 旭
 意 上 也 上 也 上 一 上 福 上 山 上 已 上 晴
 咲 上 也 上 也 上 一 上 福 上 嘉 上 州 上 一 上 晴

暮らしてゆく年やこころもたなへし 奉 管絃 意 玉

清らかなる世に暮らしてゆく春の雪 下毛 融 雪

人々の心の蒼んく暮らしてゆく 廣小海 棠 飲

暮らしてゆく年やこころもたなへし 或花 涼 雪

春の餅より暮らしてゆく チハリ 梅 裡

夕に人の心より暮らしてゆく 糸 意 尺

梅より暮らしてゆく エチ 而 足

故の春や秋と暮らしてゆく 秋四 竹 雄

枕邊より暮らしてゆく お俳諧 の うら まいそを

凡そ の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく

夕の光 す 暮らしてゆく の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく

清らかなる世に暮らしてゆく の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく

春の餅より暮らしてゆく の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく

夕に人の心より暮らしてゆく の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく

梅より暮らしてゆく の 暮らしてゆく の 暮らしてゆく

山崎とて又庫よりくこころ——此条
 就きしむるなりぬきも烟草色に生来
 至志味もさうみりり山崎のまゝの元山
 阿波ハ孤程の如きぬき色に鄙くも高上れ
 坊々もさすなりききし俳諧ゆきまはれ
 此烟うきこころ作と西風の味もあつたりし
 誰りくは是を味ひしきもあつたりし

昔の想ひの夏四月 菊と見し
 乙卯



慶應元年 1865



